ツイノスミカ　夜更けの星

玉井江吏香

翠子　（みどりこ）　娘
彬子　（あきらこ）　母

※　初演は２０代の女性二人で上演

居間。センターに卓袱台。あるいはテーブル。小さな庭が見える。夏の終り。午後。セミが鳴いている。ときに家族の団欒の間となり、客間となった場所。女が一人、庭を見ている。もう一人の女、あとから入って来、庭を見ている女をしばらく見つめる。

翠子　彬子さん、

彬子　・・・

翠子　荷物、奥の和室に入れたけど。

彬子　・・・二階？

翠子　二階は、上がるの大変でしょ。

彬子　そうねえ・・・ありがとう。

翠子、お茶を淹れる。少し間

彬子　恭介さんは？

翠子　あ、さっき荷物置いて。そのまま車で用事済ますって。

彬子　ああそう・・・あの辺、ずいぶん、枝が広がって。

翠子　垣根の木？そうなの、ごめん、植木屋さんに来てもらう時間が取れなくて。

彬子　ああ。忙しかったから。

翠子　お茶飲む？今年も、静岡の弓子ちゃん、新茶送ってくれた。彬子さんに、って。

彬子　あら、申し訳ないわね毎年。なにか、

翠子　うん、またこっちのもの、送っとくね。夏はでも、蜜柑もないし。海のものも、静岡、伊豆もあるしねえ、

彬子　なんでもいいのよ、気持ちだから。

翠子　うん。

彬子　弓子は、ちゃんとやってるみたいね、姉さんが死んでから。あの子も大変だったと思うけど。あそこ、子供弱いしね。

翠子　うん。・・・風、すこしあるね。

彬子　蝉が。

翠子　寒くない？大丈夫？

彬子　（少し笑って）この夏に？

翠子　（少し笑う）

彬子　大丈夫よ。

翠子　こっちへ来る？

彬子　ああ、せっかく翠子さんが淹れてくれたお茶。

翠子　大丈夫？

翠子、彬子の近くへ寄り、支えようとする。彬子、それを制し、ゆ

っくり、自分の足で、卓袱台（あるいはテーブル）へ移動。ゆっくり座る。翠子、見届けてから、しずしずと儀式のようにお茶を勧める。

翠子　どうぞ。

彬子　いただきます。

彬子、ゆっくりお茶を飲む。

翠子　どう？

彬子　９０点。

翠子　えーー。完璧だと思ったのに。

彬子　完璧なんてある訳ないでしょ。９０点で充分よ。

翠子　えーーー。何がマイナス１０？湯呑も温めたし、お湯の温度だって気をつけたし。

彬子　ふふ。内緒。

翠子　えーーー・・・

彬子　先生、なんて？

翠子　ああ、うん。

彬子　内緒？

翠子　ううん。ひどく悪くなったらすぐ連絡をって。

彬子　そう。

翠子　うん。

彬子　・・・よかった。今日は楽で。

翠子　うん。

少し間。夏の終りの蝉の鳴き声。

彬子　今年の蝉、

翠子　蝉？

彬子　病院の窓から大きい木が見えたでしょ？

翠子　ああ、

彬子　あれの下に、蝉がね・・・今年はこう、翅が出かけて途中でうまく、抜けられなくてそのまま死んでる蝉がたくさん落ちてて。

翠子　あ、私も見た、途中のやつ。

彬子　ねえ。

翠子　暑かったからかなあ、

彬子　可哀そうにね。

蝉の鳴き声。少し間。

彬子　まだ若いんだし、
翠子　んん？なあに突然？（少し笑う）
彬子　こんなにきれいに生んだんだから。
翠子　うん。
彬子　だれかいい人いないの。
翠子　（少し笑う）いるかもよ。
彬子　（少し笑う）そうなの。

一瞬間

翠子　この話、前にもしたね、ほら、私が離婚して戻ってきたとき。
彬子　そうだった？
翠子　したよ。

蝉の鳴き声。

翠子、縁側へ。最初に彬子が座っていたのと同じ状態に。以降、過去。

彬子　翠子さん。
翠子　・・・
彬子　荷物、二階の部屋にあげておいたから。
翠子　宅急便、
彬子　一昨日の、夕方だったかな。一回昼間来てくれたみたいだったんだけど。私もパートで居なかったから、夕方もう一回来てもらって。
翠子　すみません。
彬子　なにも。いいのよ。
翠子　・・・

一瞬間

彬子　ちょっと、びっくりしたけど。

少し間。

彬子　冷たいお茶飲む？
翠子　うん。・・・あ、静岡？
彬子　そう。姉さんから。

翠子　おばさん、元気かな。

彬子　元気元気。兄さんの会社が景気いいみたいで、高そうな補正下着も一緒に送ってくれて。翠子さんも使う？

翠子　補正下着？すごそう。

彬子　すごいのよ、こう、この辺がきゅうっと。

翠子　へえーー？

彬子　やっぱり高級品は違うわね。デザインもだけど、肌触りがね、違うのよ。着てみる？

翠子　いらない。

彬子　冷えは身体に悪いから、ガードルくらいはつけた方が、

翠子　いらない。

彬子　そうね・・・まだ要らないか。

彬子、話しながらお茶を淹れる。

彬子　こっちで飲む？

翠子、すっと立ち上がって卓袱台（あるいはテーブル）へ移動。

彬子　どうぞ。

翠子、一気にお茶を飲む。

翠子　美味しい。

彬子　翠子さんも恭介さんもこのお茶好きよね。恭介さんも毎年、そろそろ冷たい緑のお茶って言うもんね、

翠子　・・・

少し間。蝉の声。

彬子　蝉が、夏の終りっぽくなってきたね。

翠子　・・・

彬子　今日、晩御飯なにがいい？食べたいものある？

翠子　・・・

彬子　お寿司、つけてあげようか？手巻き。

翠子　うん。

彬子　お刺身にいいのがあったらいいんだけど。あとで魚八さん、行ってみる？

翠子　魚八さん・・・元気？

彬子　元気よ、最近お孫さん出来て。でもほら、３丁目にスーパー

出来たでしょ。なかなか厳しいみたい。

翠子　そうなんだ・・・

彬子　ほかにある？

翠子　？

彬子　食べたいもの。

翠子　や。もう。そんなに、

彬子　遠慮しないで。

翠子　遠慮じゃ、・・・（少し笑って）餃子。茶碗蒸し。

彬子　翠子さんと恭介さん、ほんと好きなもの似てるよね。

翠子　だって親子だし。

翠子、空のコップを見つめる。

彬子　お代わりする？

翠子　彬子さん・・・

彬子　・・・

翠子　ごめんなさい。勝手に家出て、勝手に結婚して、勝手に戻ってきて。

彬子　・・・勝手に荷物送ってきて。

翠子　・・・

彬子　ほんとに。

しばらく間

彬子　言いたくなかったら、

翠子　・・・うん。

彬子　・・・

翠子　ごめん。

彬子　・・・なんもなんも。いつでも帰って来ていいのよ。ここは翠子さんの家なんだから。

翠子　・・・うん。

彬子　なんもなんも。

翠子　・・・うん。

蝉の声。

ここより、現在

翠子　そういえば、恭介さん、遅いね。

彬子　あの人はね。

翠子　用事、時間かかるって言わなかったけど。

彬子　あの人ね、怖がってるの。
翠子　え？
彬子　私と居るのを。
翠子　そんなこと、
彬子　何を話していいか、分からないんだと思う。
翠子　・・・
彬子　ずっとそうなの。翠子さんが生まれたときも。
翠子　うん、
彬子　仕事でどうしても来れないって。
翠子　それは仕方がないんじゃ、
彬子　わざとよ。
翠子　・・・
彬子　絶対。
翠子　そ、そうなの。
彬子　夏休みにキャビンに泊まって、あなたが夜中居なくなっちゃったときがあったでしょ？
翠子　ああ、バーベキューのとき、
彬子　あの時も「や。帰ってくるだろう、そのうち」とか言うし。
翠子　彬子さん、必死の形相で探し出してくれたけど、あれ、星見てただけだから。
彬子　二人で星座標見たわね、
翠子　夏休みの宿題で。こう、くるくる回して。
彬子　でも全然星座表と星が合わなくて。
翠子　未だにわかんない、星座表の使い方。
彬子　宿題は？
翠子　見えたって言い張った。

二人笑う。

彬子　翠子さんが出て行った時も、
翠子　うん。
彬子　文鳥が近所のねこにやられた日も、
翠子　白ちゃん、
彬子　白ちゃん。何も言わなかったし。
翠子　・・・
彬子　変化がね、
翠子　・・・
彬子　苦手なのね。どう対応していいのか、わかんないのよ、あの人。男の人ってそうなのかしらね。可哀そうね。
翠子　白ちゃんをね、

彬子　？

翠子　（縁側へ）庭のね、あの辺に埋めたの、恭介さんと。今思い出した、恭介さん、泣いてた。

彬子　うそ。

翠子　（大袈裟にしゃくりあげる真似）って。

彬子　あら。大変。

翠子　大変だった。

彬子　可哀そうね。

翠子　うん。

彬子　（少し笑う）そう。可哀そうね。

少し間

彬子　みどりのお茶ね、水だしするの、ゆっくり時間をかけて。

翠子　・・・うん。

彬子　一晩。待つことも大事よ。

翠子　・・・はい。

彬子　床の間のタンスの上の抽斗の中に、私の料理ノートが入ってるから、それ見て。

翠子　・・・（床の間の方を思わず見る）

彬子　来年は、翠子さんが作ってね。

翠子　・・・（はい）

静かに。言葉もなく。

夜更け。縁側に人影。誰なのか、見えない。

翠子　彬子さん？

翠子、訝し気、あるいは心配、不安。

翠子　彬子さん？夜は、冷えるから、

彬子　お母さん、来年はお庭にプール出して。

翠子　・・・

彬子　枇杷の実に、アリさんが。きっと甘いからね。

翠子　・・・

彬子　未だに分かんない、星座表の使い方。

翠子　・・・

彬子（と思われる人影）静かに歌い始める。※

あかいめだまの　さそり
ひろげた鷲の　　つばさ

途中から翠子も歌う。遠慮がちに、だんだんきれいに重なる。

あをいめだまの　小いぬ
ひかりのへびの　とぐろ
オリオンは高く　うたひ
つゆとしもとを　おとす

彬子、縁側から、室内の翠子を見、

彬子　　バイバイ。

彬子、縁側の奥へ、或いは庭へ消える。

翠子、追いかけそうになる。彬子が消えた方向を見つめる。

翠子　　バイバイ。またね。

静かに、星巡りの歌（音のみ）

音、消える。

おしまい

※宮沢賢治「星巡りの歌」